

みおすじ

第8号

平成11年11月15日

発行
愛知県立三谷水産
高等学校同窓会



創立六十周年を 大成功させよう

会長 小田 喜代春

みおすじ発刊にあたりまして一言ご挨拶申し上げます。

日本は、やや消費の伸びも見られ少しは期待感も感じられる昨今ですが、会員諸兄には職場・地域にてご活躍のこととお喜び申し上げます。

会長就任以来今日を迎えることができましたのも、ひとえに会員諸兄の手厚いご指導、ご鞭撻のおかげと心よりお礼申し上げます。

母校は、来年平成十二年に学校創立六十周年を迎えます。

この周年記念行事の計画を協議する学校、PTAと三者一体となった実行委員会の準備会では、次のような行事を考えております。

第一に、「太平洋フェリー」いしかり」をチャーターして、在校生を招待し同窓会会員と共に

に伊勢湾体験航海を実施します。

記念式典は、フェリーの船内で行います。

なお、体験航海には、海の学校と山の学校の交流も兼ね愛知県の富山村小中学校の全校生徒を招待します。

第二に、カッターレース大会協賛です。

これは、本年度より「海の甲子園」を目指して地区カッターレース大会が、全国水産・海洋高校カッターレース大会に昇格し、実施されました。

このレースは、毎年「海の記念日」の七月二十日に実施します。

第一回大会から数年間は、母校を主管校としていきます。

今後永く開催できることとなるように考えております。

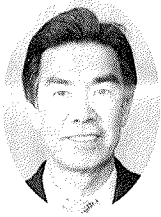
行います。来年三月末には、第一回目の住所調査の葉書を発送できるように準備中です。会員の皆様のご協力により、より良いものを発刊できますことを念願します。

第四に、創立六十周年記念誌の発刊を計画しております。この記念誌は、写真集にしたいと考えております。

いずれにいたしましても、これらの記念事業には、多くの費用を要します。会員の皆様のお力添えをいただき成功させたいと思います。皆様には、同封いたしました趣意書を読まれまして、これらの周年行事にご賛同いただき、ご協賛を心よりお願いいたします。

さて、本年度の総会ですが、平成十二年一月二日午前十一時からホテル竹島で開催いたします。当日は、懐かしい恩師の先生方も多くご招待する予定ですので、多くの会員の皆様方のご参加をただけますようお願いいたします。

最後に、会員諸兄のますますのご活躍をご祈念申し上げますと共に、本会へのご指導と今後一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。



水産高校の重要性

校長 市川 優

同窓会の皆様には益々ご健勝にて各方面にご活躍のこととお喜び申し上げます。

また、日頃は本校発展に対し、並々ならぬご支援ご協力を賜り厚く御礼申し上げます。

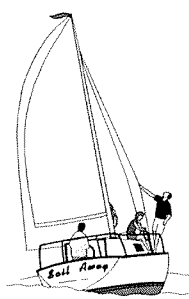
私も、この伝統と歴史ある三谷水産高校に赴任して3年目、私の気持ちを述べさせていただきます、近況報告に代えさせていただきます。

蒲郡に生まれ蒲郡で育った私は、子供の頃に遊んだ三河の海を想うとき、あまりの変化に寂しい思いがこみ上げてきます。大正二年五月「尋常小学唱歌(五)」に掲載された、文部省唱歌「海」の叙景歌に歌われた

松原遠く消ゆるところ
白帆の影は浮かぶ
干綱浜に高くして
鷗は低く波に飛ぶ
見よ昼の海 見よ昼の海
は何処に行ってしまったのでしょう。

唯一の「海」を媒体とする水産高校で、多感な青春の3年間を共に過ごされました。皆様は、果てしなく広く、限りなく深い海から、おおらかで思慮深い思いやりの心を。そして、多くの生命を育み、優しさで美しさを湛えた海から、自己を厳しく律する心と、行動力に富んだ資質を培われたのであります。これらの資質こそ、本校同窓生の持つ、誇るべき水高魂として受け継がれているものであります。

しかしながら、我が国の水産業を取り巻く現状をみると、周辺水域の水産資源は、海洋環境の悪化や過剰な漁獲努力量等から全般的に低水準にあり、漁業生産は減少を続けています。特に漁業就業者の減少・高齢化の進行は著しく、将来にわたって周辺水域の水産資源を持続的に利用し、国民に安定的に水産物を供給していくための生産体制の脆弱化が懸念される状況にあります。



しかし、目前に迫った激動の21世紀の課題 ①人口増加 ②食料危機 ③環境破壊 ④資源の枯渇 ⑤新エネルギーの開発の5つの問題を考えるとき、人口増加を別にして、残りの課題を解決するためのキーワードこそ、海にあるのではないのでしょうか。

これらことから、水産・海洋系高校こそが、次代を担う人材育成の中心的役割を果たす教育機関となるものと断言できます。このためには、水産・海洋系高校が魅力と活力ある学校となることが重要であります。

夢を抱き、真にやりがいを持って海に生きる若者を育てる水産・海洋教育の一層の活性化と発展を願う為にも、水産関係業界の労働条件と労働環境の改善が不可欠で、日本の水産業をどうするのかという展望と将来像を国レベルで早急に構築することを期待したい。

退職閑話

情報通信科

久田和生

「時は流れる」とか申しますが、私が初めて蒲郡を訪れたのは、昭和の二五、六年の頃。子供心にも、あくまで透き通った海、まるで箱庭を見ているような竹島と蒲郡ホテルのたたずまいに、強烈な印象を受けた記憶があります。

二度目はおおよそ一五年後の昭和四一年、本校赴任のときでした。このときは、染色工場の影響が濃緑色の三谷港内、ヘドロの海、背中の曲がった鱈や鰻。こうも変わったものかと驚愕の思いでした。

爾来、アツという間に流れた三三年。縁がありましたのか、この地が、私の人生で一番永く過ごした処となりました。

人生、「過去に拘らず、現在に滞りまわることなく、先のこと」を思つて生きて行くと、脳内でβエンドルフィンとかが分泌され、穏やかで健康的に過ごせるようですが、退職直後の私には、卒業生の皆さんのことや本校のこと、自分のしてきたことが、ついつい思い出され、過去に

拘る日々が続いております。今思えば、在職中何ということもせず、ただ「日暮れ、腹減れ」で過ごしてきた私が、こうやって筆を執ることができるのも、この三二年間、触れ合いの時を持たせてくださった同窓会の諸先輩、卒業生の皆さんのお陰と深く感謝しております。

最近、蒲郡近辺の海もきれいななりつつあるようで、西田川にもシーズンになると釣り人が居るようになりました。昨年だか、鮎が昇ったとも聞いております。生活環境もよくなり、今後の生活の場所にしても、と思うぐらいの処になりました。卒業生の誰かと糸をたれながら、そして、学校を覗きながら・・・

取り留めのない話して終始してしまいましたが、同窓会の益々のご発展をお祈りするとともに、本校をより所とする者同士、同時代に生きる社会人同士としてのお付き合いを願いながら、筆を置きたいと思ひます。皆さんも、お元気で！

海に「ロマン」を求めて

海洋漁業科

松岡邦人

昭和三十九年三月二日、おりしもこの年は東京オリンピック開催で日本中が活気に満ちあふれた年でした。そして私自身東京のある水産会社に就職し、マグロ漁船に乗り組み竹芝棧橋を出港した日でした。

めざすは大西洋の漁場で、スエズ運河を通過し、ジブラルタル海峡を抜け漁業基地としていたカナリー諸島のテネリフエに到着するまで四十五日掛りました。その後は、大西洋漁場におけるマグロ操業の連続でした。当時の大西洋には独航船も含めて百五十隻近い漁船が操業していました。学生時代にマグロ漁業実習は少し経験したような気がしましたが・・・、全く勝手がちがいで、とまどいの連続で当座は操業と睡眠だけの日々であったのを記憶していま

す。学生の時間かされた「海にはロマンがある」は遠い夢物語なのか、と思つたりはした。適水中(好漁場を求めて移動する)の航海当直中は最もホツとする時間で好天時は夜間星空を眺め「あれが南十字星」か、他の星と比べて美しいなあ・・・、北極星は暗いな

あと感じたのがこの時でありました。また、僚船との会合、乗組員との談笑の中にも船乗りとしての楽しさと数多くの教訓を与えてくれました。昭和四十二年十二月一日縁あつて私は三谷水産高校に赴任することになり四航海当時の漁業実習船「日吉丸」、「晴和丸」に指導教官として乗船いたしました。船はやや小型だなあと感じましたが、企業人としての経験があつたためかすんなりと馴じむことができました。その後は二隻の船が一隻の大型船「愛知丸」と変わり、船内設備・エンジン・計器類は以前に比べてはるかに秀れていると思つています。一昔前の漁業中心から航海・機

関実習に変わりつつあるのが現状ではないでしょうか。現今多様化した生徒の入学で活力が失われつつある水産高校ではあります、これらを支えて下さるのは卒業された同窓生の方々、教職員であると信じています。「海にはロマン」があり「活力」もあります。

最後になりましたが同窓会員の皆様と貴会が益々発展されることをお祈りいたします。

新任のご挨拶

事務長 福島吉三

蒲郡東高校から十七年ぶりに三谷水産高校に復帰しました。見なれた校舎、グラウンドを見ると若かった昔が想い出

され、大変なつかしく思っています。転勤早々、4月には小型実習船「あおしお」の竣工式、7月には全国水産高校カッターレース大会と実業高

校ならではの各行事に圧倒されています。それにしても、カッターレース大会に見せた職員、PTA、生徒達が目標

に向って一丸となってやりとげる行動力は、さすが三谷水産高校と感心しました。

私も今年から本校の一員としてがんばっていきたくと思っていますので、よろしくお

願います。

事務主任 都築慶一

今までに、普通科の学校と養護学校の経験しかなく、実業系の学校は初めてということとで少し不安がありました。

しかし、校長先生を始め職員の方が明るく親切で、そんな不安もすぐに吹き飛び、今ではいい雰囲気の中で仕事をさせていただいております。

また生徒の皆さんも、素直で真面目な人が多く、挨拶なども元気がよく、明るくさわやかで礼儀正しいのにも感心しました。

今では、「いいじゃん、三谷水産」の心境です。これから

保健体育科 小田年宏

三谷の町で漁師の息子として生まれ、三谷の海で釣りを

して育った私ですが、三谷水産高校については近くを通る

だけで、内部については全く解かりませんでした。父親の卒業した学校という事で、多

少のイメージは持っていたものの、「聞くと言っていると違

いで来認識を新たにすることはかなりです。恵まれた教授陣と施設、設備の整った学校です。少しでも生徒の意欲を引き出し、教育の成果が上がるよう努力してまいりたいと思っ

地歴科 西頭敦志

私にとつて本校は4校目の勤務校となります。それぞれの高校にはそれぞれの個性がありました。ここに来る前、

奥三河の学校にいましたが、そこには私たち日本人が忘れかけた、のどかな農山村の「風景」が残っています。

私は教師が子供を育てるといふより、風土が子どもを育てると思っております。こ

れからの時代、本校をとりまく環境は厳しいものがあると思えます。「港の風景」

を大切に地域に愛される学校となるよう努力していき

理科 原瀬能幸

教員になって13年目、教科は理科、専門科目は地学・生物です。歴任校は、安城農林

高校に5年間、豊田東高校に7年間、在籍していました。

前任校は女子高であったので本校とのギャップはとて大きく、今だに慣れるというこ

とはありません。しかし、本校では生徒指導と生徒会を経験させていただき、生徒のマ

活動の育成を目指して、生徒とともに努力しています。

情報通信科 山田 学

コンピュータ専門学校の教師として5年間勤務の後、縁がありまして情報通信科の職員として赴任して参りました。

以前の学校とは違い、水産高校特有の行事やイベントがあり、様々な目標や個性を持

った生徒がいるため、少し圧倒されておりますが、少しでもお役にたてるよう頑張っていきたいと思

います。今後ともどうぞよろしくお願い致します。

用務員 鈴木研二

本校を卒業して、すぐ「日吉丸」「晴和丸」「愛知丸」と

乗り継いで20年、そして3年前に大病をして左目は失明、

右目もおおつかないまま本校の用務員として採用が決まり

少し不安でした。でも、先生方のやさしい心配り、いつでも声をかけてくれて、そのお

新小型実習船「あおしお」

海洋漁業科

学科長 山 仲 重 行

本船は初代「蒼潮」から数えて三代目にあたり、一級小型船舶操縦士養成に関する教習艇及び試験艇（A型船）として使用するほか、愛知県沿岸海域で主に次の実習を行う

- 一、漁業実習（曳縄、瀬釣）
- 二、栽培漁業実習
- 三、潜水、海洋スポーツ実習
- 四、航海実習
- 五、操船実習、機関実習
- 六、海洋観測

代船建造については基本設計及び監督を社団法人漁船協会に委託し、形原造船株式会社によって左記の日程で建造された。

起工 平成十年十二月二四日
進水 平成十一年三月一八日
竣工 平成十一年三月三一日

建造にあたっては次の点を特に配慮した。

- 一、船体は軽く、耐久性、耐蝕性、環境対策等に優れたアルミ合金船とする。
- 二、復原性、凌波性、操縦性等に優れ、安全に実習が行え



るよう配慮する。
 三、有害な振動及び騒音、換気、防熱対策を十分に配慮する。
 主要目は左記のとおりである。

全長 一八・三〇m
 登録長 一四・九五m
 登録幅 四・四〇m
 登録深さ 一・七四m
 計画満載喫水 〇・九〇m
 総トン数 一九トン
 主機 rpm 八五〇 P S × 二〇〇〇
 航海速力 約一九ノット
 定員 二四名(第一種小型漁船)

北海道洋上研修を終えて
 水産食品科 担任
 二年学年主任 丸崎敏夫

本校は平成十一年度から従来のスキー修学旅行に代えて、太平洋フェリーを利用して北海道洋上研修を実施し、大きな成果を収めました。

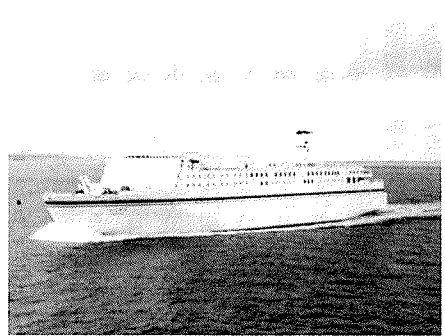
この研修は、特色ある学校づくりの一環として二年生で実施し、魅力ある学校行事の中核をなすものと考え計画しました。この研修を通じて、水産高校のコンセプトである「海」「船」「魚」を同時に体験させ、水産高校としての誇りを持たせるとともに、大草原や北海道という大自然の中に身を置くことで、自分を見つめ直す機会ができ、「ゆとり」の中で「生きる力」を育むという二十一世紀を展望した教育活動の根幹をなすものと期待しています。

また、豪華フェリーによる洋上研修を含む体験航海は、海洋技術者の育成という水産高校目標において、重要な動機付けとなり、実際に魅力的な職場環境に触れることで、生徒達の進路選択の幅を広

げ、「海」「船」へとつながることを目指しています。

そこで、洋上研修ではこの目標達成に向けて魅力的な内容になるように検討を重ね、関係各方面のご協力により、計画以上の内容で実施することができました。特にこの研修で利用する太平洋フェリーは本校OB・OGが二十数名在職し、重要な職責を担って活躍されています。この研修の計画段階から同社取締役運行本部長丹羽佑三氏、同名古屋支店長大澤豊氏、実際の研修に際しては船長西山朝則氏、機関長松井孝夫氏をはじめ七名のOB・OGの皆様方が、船上での研修や各部門の説明に、講師役として在校生にきめ細かく配慮に富んだ指導をしていただきました。生徒達は先輩方の活躍ぶりに感動し、進路選択の重要な動機付けの一助になったものと確信しています。

この研修は四泊五日(船中二泊)の日程で実施しましたが、終日好天に恵まれ、快適な船旅と北海道のバス旅行が経験できました。北海道では襟裳岬の「風の館」や富良野「チーズ工房」、小樽では「お



たる水族館」等、各学科の特色に合わせた施設の見学と北海道の雄大な大自然にふれ、小樽運河街や千歳空港内の自由散策で、北海道ならではの土産品やグルメを楽しみ、飛行機で帰校するという大変充実した内容でした。

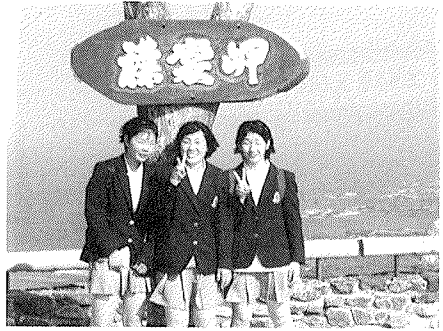
豪華大型フェリーによる船旅と飛行機による空の旅の醍醐味をもち、この研修の成功に大きく貢献しました。

このような充実した研修が、従来のスキー修学旅行と同程度の経費で実施できることは、生徒にとって大きなメリットであり、本校がこの研修を通じてますます活性化しました学校づくりができますように取り組むたいと思います。

北海道洋上研修の思い出
 水産食品科 二年
 朝倉孝志

高校では初めての、太平洋フェリーを使った研修旅行は六月一日午前一時、学校に集合したときから始まった。学校での最終打ち合わせを終え、バスに乗り名古屋港へ向かう。バスの中では、フェリーはどのくらい大きいのだろうか、北海道ではどんなところ泊まるのだろうかなど、いろいろなことを思いつつていた。

名古屋港に到着してまずフェリーの大きさに驚いた。そして乗船した後の、ホテルのような内装にさらに驚いた。自分が宿泊するB寝台に入り、荷物を置いて船の甲板に上がり出港風景を眺める。大きな橋がライトアップされ、周りの電灯と重なり、すばらしい景色を作っている。ブリッジで姉妹船「いしかり」との交差見学が行われた。「いしかり」は僕の乗っている船のすぐそばを通り、あちらの乗客がこちらに向かつて手を振ったり、夢中でカメラのシャッターを



押した。

「いしかり」が通り過ぎると各機関の見学にはいる。エンジンを見たり、スクリーンを回している太いシャフトを見たりと話し声を聞こえないような大きな音のする機関室を見て回った。

こんな大きな音の所で働いている人は大変だなあと思った。

夕食のバイキングのメインはステーキだ。一人で七枚も八枚も食べている人がいたけれど、僕はそんなに食べられない。

夕食が終わると仙台港出港風景の見学があった。仙台港では豊橋港と似たところがあった。それは新車がたくさんおいてあるのと、ニチレイの看板があったからだ。

ついに下船の時が来た。最

後の出口では、チーフパーサーが「ありがとうございました」と丁寧に見送ってくれた。いい船だなあと考えた。

苦小牧ターミナルビルに入ると、道北バスのガイドさんが並んでいた。僕の乗るバスは一号車で、ガイドさんはなんと手作りの地図で、これから行く場所をわかりやすく説明してくれた。世の中にはこんなすごいバスガイドさんがいるものだなあと感心した。さあこれから北海道、どんな経験ができるか本当に楽しみである。

全国水産・海洋高等学校

カッターレース大会

海洋漁業科

学科長 山 仲 重 行

第一回全国水産・海洋高等学校カッターレース大会は、三谷水産高校が主管となり、平成十一年七月二〇日(火)「海の日」・二一日(水)の両日にわたり、九州・沖縄、四国、日本海南部、関東・東海、日本海北部、東北の六地区の水産・海洋高校の代表一四校に加え、同じ海に学ぶ宮古、館山の両海員学校を加え、一六

校(参加選手約三五〇名)の参加の下、蒲郡港蒲郡市民会館前特設海面コースで開催されました。

開会式は、蒲郡市民会館で盛大に行われました。各校選手団は主将の掲げる校旗を先頭に、校名入りのプラカード持った女子生徒に先導され、それぞれの学校の伝統あるユニホーム姿で入場行進曲に合わせて堂々と入場し、大会会長の開会宣言、各来賓祝辞、主催者挨拶、選手宣誓など、厳粛の中にも華やいだ雰囲気でも感涙も新に行われました。

競技は、競技規定により、艇は、九mクリンカー型カッター一二人漕ぎを使用し、コースは、五〇〇m折返し往復一〇〇〇m、四艇同時スタート、着順判定により上位の二チームが通過し、残り二チームが敗者復活戦としました。

第一日は予選、敗者復活戦、準々決勝戦が行われ、八校が二日目の優勝戦へと駒を進め、全国から参加した一六校のうち、二日目の優勝戦へ進出したのは、静岡県焼津水産高校のほか、長崎県長崎水産高校、大分県大分海洋科学高校の九州勢と国立宮古海員



学校の四校でした。

終始リードした焼津水産が追いつがる大分海洋科学高校と宮古海員学校を振り切り、見事、第一回大会優勝の栄誉を獲得しました。

今大会は、出場した各チームのレベルは高くどのレースも技術が伯仲し、順位決定では二秒のタイム差に三艇がゴールするという微妙な順位判定となるレースもあり、白熱したレースとなりました。

若さ溢れる各艇選手の力強い漕艇には観戦の市民も惜しみない拍手を送っていました。大会の模様は、情報通信科の生徒により最新のマルチメディアを駆使し、その状況をデジタルカメラで撮影し、PHSで会場から三谷水産学校

のパソコンに、送信し、受信した画像をインターネットに載せ全国の水産・海洋高校や一般視聴者に大会の様子を伝え、刻々変わるレースの様子や結果をリアルタイムで送信し、参加校の母校ではブラウン管の前で応援することができ大変好評を得ました。

我が三谷水産高校の成績は振るいませんでしたが、本大会の目的とする『水産・海洋高等学校の伝統的スポーツであるカッター競技を通して、海にロマンを求める生徒の育成及び漕艇技術の向上を図り、併せて参加校相互の親睦を深めるとともに、水産・海洋教育の重要性と素晴らしさを広く一般にアピールする。』ことが十二分に達成され、大成功のうち大会を終えることができました。これも皆様のお力添えの賜と感謝申し上げます。

蒲郡市は、日本の中央で交通の便もよく、温泉地を控える宿泊などの施設が整い、大会開催地としては最適地です。来年以降もこの会場を「海の甲子園」と位置づけ、全国水産・海洋高等学校カッターレース大会の開催が予定されて



います。
同窓生の皆様のご支援・ご協力をお願い申し上げます。

【主催】
全国水産高等学校長協会

【共催】
全国水産高等学校実習船運営協会・全国高等学校水産教育研究会

【主管】
全国水産・海洋高等学校カッターレース大会実行委員会・愛知県立三谷水産高等学校

【後援】

文部省・財団法人産業教育振興中央会・愛知県教育委員会・蒲州市・蒲州市教育委員会・社団法人大日本水産会・社団法人漁船協会・日本鯉鮪漁業共同組合連合会・全国漁業協同組合連合会・社団法人

- トロール底魚協会・社団法人全国底曳網漁業連合会・社団法人全国まき網漁業協会・全日本さけます漁業協会・共同船舶株式会社・財団法人東京水産興会・日本内航海運組合総連合会・国民の祝日「海の日」海事関係団体連絡会・愛知県立三谷水産高等学校同窓会・愛知県立三谷水産高等学校PTA・愛知県立三谷水産高等学校PTA幹事OB会
- 【出場校】
青森県立八戸水産高等学校
宮城県水産高等学校
千葉県立銚子水産高等学校
千葉県立安房水産高等学校
東京都立大島南高等学校
神奈川県立三崎水産高等学校
静岡県立焼津水産高等学校
愛知県立三谷水産高等学校
新潟県立海洋高等学校
鳥根県立浜田水産高等学校
徳島県立水産高等学校
長崎県立長崎水産高等学校
大分県立海洋科学高等学校
沖縄県立翔南高等学校
国立宮古海員学校
国立館山海員学校「優勝戦結果」
優勝 焼津水産高校
準優勝 大分海洋科学高校 (5分46秒20)



- 三位 宮古海員学校 (5分50秒12)
四位 長崎水産高校 (6分12秒76)

各科紹介

海洋漁業科

学科長 山仲重行

海洋漁業科は平成八年の学科改編により、従来の漁業科から改編された学科です。現在本科一年三八名、二年三六名、三年二八名、専攻科一年九名、二年六名が在籍しております、それぞれ勉学、実習に励んでいます。また平成八年より一級小型船舶操縦士養成施設の指定を受け小型船舶免許の取得も可能になりました。

水産食品科

学科長 片山 豊

夏の名物であったマグロ缶詰製造実習が秋にまわり、うだるような暑さから開放されました。イカの缶詰やレトルト食品の試作をはじめ、新しい総合実習の項目を探す毎日です。文化祭では、定番のうどん屋さん、びつくり缶屋に加え、年によりお菓子屋さんや、おでん屋さんに来る人を喜ばせています。

栽培漁業科

学科長 小林清和

現在の「栽培漁業科」の名称は平成8年度に学科改編されたものです。それに伴って、バイオテクノロジーやダイビングに関する施設と設備が充実され、従来の教育内容に加えて、染色体操作によるニジマスやアユの三倍体魚の作出、ワカメ配偶体やノリ糸状体などの培養実験、また、潜水土やCカードのライセンスを取得するためのスクーパーダイビングの実習も行っています。その他に、地域産業界との連携の一つとして、地元漁協、砕石会社とタイアップして、アサリ漁場の改善実習も取り入れています。

水産工学科

学科長 伊藤秀男

機関科から水産工学科に改編して四年になります。現状では目的意識に乏しく、就学途中で進路変更する生徒もいますが、全般的にはそれなりに頑張っている様子が伺えます。平成五年から海洋科、工学科では一年生で「愛知丸」による沖縄沿岸航海が、今年から二年生全科で往路は太平洋フェリーの船を利用して北海道洋上研修が、三年生の遠洋航海と毎学年、船での実習が実施され、まさに海のロマンを求め、海の男を育てるにふさわしい教育内容が組み込まれています。とくに、沖縄、北海道への航海は生徒に好評です。

職員の間では、電機科の科担任の榊原先生が今年度で